

ミュージアムライブラリーについて

土屋定夫 (当館司書)

はじめに

「ミュージアムライブラリー」ってちょっと聞き慣れない言葉でしょう。直訳すれば「博物館図書室」、つまり博物館の中にある図書室という意味になりますね。そんなことわかっているよとおっしゃる方も多いと思いますが、では、具体的に「ミュージアムライブラリー」が果たすべき役割とは何かと尋ねられると、これが意外に難しいものがあるのです。

ここでは、当館のライブラリーの現状を紹介しながら、「ミュージアムライブラリー」とは何か少し考えてみましょう。

ライブラリーの公開

公共図書館が私たちの身近なものになってきたのは、そんなに古い話ではありません。まして、博物館のライブラリーで自由に利用できる所は、ほんのわずかしかなかったりしません。多くの博物館には図書室の機能を果たしているセクションが設置されていますが、そのほとんどは一般には公開されておられません。理由は幾つか挙げられるでしょう。公開に耐え得るだけの予算的措置や施設が不十分である、また、専任の職員等を配置できないなどのマイナス要素が考えられます。

では、当館はどうなっているのでしょうか。旧神奈川県立博物館の時も専任の司書はいましたが、その他の点で一般の方たちへのサービスが思うようにはできませんでした。現在は再編整備により、自然系と人文系とに分かれ、それぞれの館に司書も配置され、資料収集をおこなっています。まだまだ、十分とは言えませんが、学習の場としてのライブラリーを公開しています。

鳥の鳴き声が聞こえるライブラリー

当館のライブラリーでは、自然誌に関する図書や雑誌の閲覧、必要な文献の複写等ができます。また、映像資料であるビデオやCD-ROMを視聴できるブースもあり、自由に利用することができます。さらに、博物館が収蔵している標本等の資料データを博物館情報システムの端末で検索することができます。3台ある端末機はいつも、利用者の

方が使われていて、とても盛況です。

この検索システムの一つに「神奈川の自然」があります。鳥や植物などの画像や解説があり、鳥に関しては鳴き声の聴けるものもあります。毎日、さまざまな鳥の音がライブラリーにこだましているのです。

図書館には静かに読書や調べものをするというイメージがありますが、当館のライブラリーには当てはまりそうもありません。当館のように自然系の博物館には、遊び感覚で来ていただき、とにかく楽しんでいってもらいたいという願いが私たちにはあります。ライブラリーも同じなのです。「学習」ではなく「楽修」して欲しいのです（「楽修」は当館の濱田隆士館長の造語です）。

ライブラリーのカウンターでは、学芸員が毎日、交替で皆さんからのレファレンスに応じています。河原で拾った石や近くの山で捕まえた虫や植物等の名前を知りたいとか、これからの地球環境はどうなってゆくのかなど、自然誌に関する事柄についての疑問にお答えしています。もちろん、文献資料等のレファレンスにも学芸員や司書が応じています。電話や手紙でも受付けておりますので、是非、ご利用下さい。

一歩先行く美術館ライブラリー

さて、ここで全国の博物館の中のライブラリーに目を向けてみましょう。3,000館を越えていると言われる博物館の中で、ライブラリーの機能を果たせる公開施設を有している館はどのくらいあるのでしょうか。統計的な詳しいデータは、まだ取られていませんが、施設も資料も専任職員も揃っている所となると1割あるかどうかではないでしょうか。そんな中で一歩先を行っているのが美術館の図書室です。開館当初から、公開スペースとしてのライブラリーを設置しているところが多く見受けられます。神奈川県内でも横浜美術館の美術図書室は、スタッフも施設も資料にも恵まれていて、美術館ライブラリーのリーダー的存在になっているようです。新しく何かを始めようとする土壌があることも大きな要素の一つなのでしょう。このことは、ミュージアムライブラリーの必要性、果



利用者で賑わうカウンター周辺

たすべき役割というものが、まだ確立されていない現状では、とても重要なことだと言えます。

アーキビストの必要性

INFOX 代表の並河みつえ氏は、『ミュージアム・マネジメント』（東京堂出版、1996）の中で、欧米の博物館が学芸員や司書と併せて、記録文献を扱うアーキビストも配置しているように、日本の博物館でも、この三者それぞれの専門性を生かした連携と分担が必要であると提言しています。確かに古文書や郷土資料などの歴史的資料は、印刷・製本されたものとは異なって、図書館の世界でも扱いにくいものになっています。

自然誌の分野で考えてみますと、博物画や古地図などがそれに当たると思われますが、自然系の博物館には当然のことながら、「博物学」の歴史に詳しいアーキビストが必要になるでしょう。

図書資料の博物館的保存へ

神奈川県内の図書館で、自然系の図書を永久的に保存していくと思われる施設は残念ながらありません。国立国会図書館さえ、戦前から戦後すぐにかけての資料の収集については、まだまだと言わざるを得ないでしょう。

出版後、半世紀以上を経た刊行物には、十分に希少価値があり、図書資料ではあるのですが、その上に博物館的資料という付加価値を付けるべきではないでしょうか。ミュージアムライブラリーの資料収集は「未来の博物館資料」を集めていることに他ならないのです。

ミュージアムライブラリーの問題点、課題等のほんの一端をみてきましたが、他にも検討すべき事柄は多く残されているのです。